The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語教師のキャリア形成 : 日本の社会構造における性別役割
Author(s)	末吉, 朋美
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2012, 46, p. 97-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語教師のキャリア形成

── 日本の社会構造における性別役割 ──

末　吉　朋　美

キーワード：日本語教師，ナラティヴ的探究，非正規雇用，
女性のキャリア形成，性別役割

1. はじめに

現在の日本国内の日本語教師数は、平成23年度の文化庁の調査では31,064人となっており、ここ5年ほどは3万人前後で推移している。しかし、その内訳をみるとボランティア等が17,573人（56.6％）と全体の半数を上回り、次に非常勤教師が9,096人（29.6％）、常勤教師はその半数以下の4,295人（13.8％）である。また、彼らの中で大学や専門学校などで教えている者は2割にも満たず、8割以上の教師は民間の日本語学校やボランティア教室などの施設・団体で教えている。これらの数字から、国内の日本語教師の多くが無償または一部有償のボランティアや授業数や日数で給料が支払われる非常勤の雇用形態であり、職場も施設・団体であることが多いことがわかる。つまり、日本語教師の職は決して社会的に安定した仕事とは言えないのである。また、日本語教育能力検定試験における受験者の男女比をみると、ここ15年ほど1：4の状況が続いており、女性は全体の約8割にもなる（日本国際教育支援協会）。この結果を見ると、日本語教師の職に就いている人に圧倒的に女性が多いことは想像に難くない。実際、私の職場であるX日本語学校においても女性の日本語教師が8割を占める。『月刊日本語』（アルク，2011年3月号）の現役日本語教師361人のアンケー

ト[1] においても回答者である教師の8割は女性であった。また、全体の約6割の教師の雇用形態は非正規雇用の非常勤であり、1カ月の総収入の平均は約14万であった。半数以上の教師の収入は5万～15万未満と低く、待遇全般についてのアンケートでも約7割以上の教師が「悪い」と答えた。それにもかかわらず、10年後も教師を続けたいと答えた教師は6割以上もいた。つまり、待遇面や雇用面に不満を持ちながらも、今後も日本語教師の仕事を続けていきたいと思っている日本語教師は多いのである。本論では日本語学校で働く4人の女性の日本語教師たちが、話し合う場を持つことでどのような効果が得られるのかを調査した時に得たデータをもとにし、日本の社会構造における日本語教師の職の持つ問題点を探る。

2. 研究概要

私は日本語学校の非常勤日本語教師が日々の業務で抱える悩みを解決することを目的として、2008年4月から2009年3月までの1年間に14回、協力者の3人の教師と私の職場であるX日本語学校の一教室を借りて「語りの場」を設けた。この「語りの場」は、以前の研究（西田, 2007）で協力者の日本語教師と語り合っていくことで互いの悩みや葛藤を理解し解決していく方向へ向かうことができた経験と、大学院で参加した「日本語教師のためのトーキング・ショップ」という授業（青木, 2006 : 151-152）の経験から思いついたものである。「日本語教師のためのトーキング・ショップ」という授業は、教師同士の良い会話は教師の学びや成長に関与すると述べたClark（2001）から着想を得てデザインされたものであり、教育現場での経験について語り合える場であった。私はその授業と同じように日々の出来事を語り合う場を設けようとしたのである。協力者の3人はいずれも20代から30代の女性教師であり、ともに私と同じ職場の同僚であった。研究を開始した当時、Jさんは20代前半で日本語教師歴3年で

あり、Pさんは20代後半で日本語教師歴3年半、Uさんは30代前半で日本語教師歴7年であった。研究方法は、Clandinin & Connelly（2000）によって提唱されたNarrative Inquiry（ナラティヴ的探究）を用いたが、Clandinin & Connelly（前掲）はこの研究方法が教師の経験を理解するのに最適なものであると言っている。この研究方法の特徴は研究者と研究協力者とのコラボレーションであり、協力者だけではなく研究者自身の経験にも焦点がおかれるため、私は「語りの場」では参加者の一人として、協力者たちと同じように教師である自分の経験を語り、その後行ったインタビューにおいても互いの意見や経験を語り合うことができた。さらにこの研究方法には「三次元」という特徴がある。「インターアクション」、「置かれる場」、「時間的な連続体の概念」はそれぞれ協力者を一人の人間として理解していく過程において考慮するものを指摘している。私はこの研究方法を用いて、3人の協力者の教師を理解していった。

3. 協力者たちの声

3.1. ワーキングプアとしての日本語教師

「語りの場」では、私たちは日常の業務に関する様々な問題や悩みを口にするだけではなく、現実問題としてこの仕事についての経済的、または将来的な不安を話すことも多かった。しかし、いくら話し合ってもその解決方法は見つからず、その後、個別にインタビューを行う中でも日本語教師の仕事の待遇の悪さや不安定さを嘆く声はなくならなかった。特に経験が長いUさんにはそれが顕著であったため、3節では主にUさんの発言を引用する。次の会話は1回目の時に、Pさんが借金をしてまで日本語教師をやりたくないと話していたことを私が話題に取り上げた時のものである。

1T：あのー　P先生だっけ　借金してまで日本語教師をやりたくな

いっていったの

2P：あ　それ私　借金をしてまでは無理

3T：あ　無理

4U：無理ですよね

5PJ：うん

6P：だから結構今年ってリミットかなって

7T：ええー　なんかどっかで聞いた［よーな

8J：きいたきいた

9U：きいたきいた］

10P：だって　お金　お金　だってねー　毎日そんな財布の中に100円とかってちょっと無理

11U：無理！＜強い＞

12P：無理です

13U：［無理です

14T：かなしいー］　200804304T1文字化[2)]

この会話を見ると、2PでPさんが「借金をしてまでは無理」と言ったあと、私はPさんの言葉を繰り返しているだけだが、Uさんは「無理ですよね」とPさんの意見に同意し、Jさんも5PJでうなずくことで同意を示している。6PでPさんは今年が「リミット」だと言って、日本語教師を続けるのは今年で最後だと話しているが、7Tで私はどこかで聞いたような言葉だと返し、それにJさんもUさんも同調している。Pさんの発言内容と似たことを皆それぞれどこかで聞いたことがあったのである。Pさんは限界だと言った理由として、10Pで毎日財布の中に100円しかないような生活は「無理」だと言っている。これは日本語教師の薄給では生活していけないことを少し大げさに言ったものだろう。UさんはPさんのこの言

葉に強く反応し、強く「無理」と発言している。私はそれを聞いて自分たちを状況を憐れみ、「かなしいー」と言ったのである。この会話の中でPさんとUさんが「無理」と繰り返し発言しているのは、ふたりの経済面の不安が特に大きかったからである。彼女らは既婚の私や実家で暮らしていたJさんとは違って、実家を離れて一人暮らしをし、日本語教師の仕事で生計を立てなければならない。彼女たちにとって経済的な問題はより切実なものであったと思われる。その後、4回目の時には、皆で今後どのように話し合いを進めていくのかを相談してテーマを決めた。私がテーマとして「未来」を挙げると、皆口々に日本語教師の仕事が続けられなくなるのは給料が安いからだと言って、日本語教師の仕事の待遇の悪さを嘆いた。Uさんは、日本語教師の仕事をたとえ正社員として働いたとしてもぎりぎりの生活さえ維持が困難な収入しか得られない就労者の社会層に当てはまると考え、「ワーキングプア（working poor）」と呼んだ。それを聞いた他の3人は安い給料で一生懸命に働いている私たちはまさに社会の底辺にいるワーキングプアに違いないと皆Uさんの発言に賛同したのである。

3.2. Uさんの「現実の壁」

「語りの場」が終わり、個別のインタビューが始まった。一番教授経験の長いUさんはJさんやPさんよりも日本語教師の待遇の悪さや不安定さに対する悩みが深く、それを「現実の壁」と呼んで未来へ進もうとする自分の道を阻むものだと説明した。Uさんは子どものときから両親の影響で海外の人と触れ合う機会が多かった。そして、日本語が好きだったUさんは、高校で大学を選ぶ際、大学のパンフレットに「日本語教育課程」という文字を見つけ、これだと思った。将来日本語教師に絶対になろうと思ったUさんは、大学卒業後はアパレル会社で働いてお金をためて、単身カナダへ飛んだ。そして現地の語学学校に直接交渉して、3か月間日本語教室

のアシスタントをやらせてもらった。帰国後、日本の日本語学校に非常勤講師として勤め始めたUさんは最初の3年間は何をやっても楽しかった。自分の道だと思える仕事を得て、日本語関連の雑誌に「天職」だと書いて投稿するぐらい日本語教師の仕事に夢中になった。そして、大学院にも進学しようと思って資料も取り寄せた。しかし、日々の雑務におわれるうちに気力も体力も奪われたUさんは、院に進学する気持ちが失せ、日本語教師を続けることにも迷いが出るようになった。このまま日本語教師を続けることに不安を感じたUさんは、インタビューで次のように話した。

U：今土曜日まで働いて月これだけかと思うとこの生活私はずっとできない　健康診断にもいきたいし　保険料も払いたいし　そう思うと八方ふさがりになってくるわけよ　やる気のあった時には他の人からどう言われようとも　給料もらわずでもやろうという勢いがあったけど【笑】　ただなんか年齢を重ねて周りを見渡せば　結婚してなくても貯金はあるらしいことがわかってくると　私やばい？って　やばいっていうかこの仕事ってこんなんなんやーってなんかショック　これだけ情熱とお金かけてきてこういうものやってんやっていうショック　なんか辛いっていうか悲しいというか

20100605U4文字化

Uさんはこのまま土曜日まで働いても月収が「これだけか」と思う程少ない生活を続けていくことはできないと話した。しかし、健康診断や保険などがある人並みの生活をしたいと思うと「八方ふさがり」になった。Uさんは日本語教師になったばかりのやる気のある時はそれらを考えずに勢いでいけたが、年齢を重ねて周囲の状況が見えるようになると結婚していない人でもお金はあることを知って、自分の状況の悪さに「やばい」と思った。Uさんはこれまで自分の情熱とお金をかけてやってきた仕事の実

態を知って「ショック」を受け、辛いような悲しいような気持ちになったのである。しかし、Uさんは今後も日本語教師を続けたいと思っていた。

U：すごく魅力のある仕事　時々遊んでいるときよりも楽しいと思う瞬間があるわけよね　これをやっているときに異常なぐらいアドレナリンが出ているような　うわーって【笑】 充実した一日やったっていう日があるのよね　だから満足ができるって　毎回じゃないけどたまにそういう瞬間があるんだよね　それが得られるのはこの仕事なわけね　だからそれを手放したくないなって思ってるのもあると思う　20100605U4文字化

Uさんにとって日本語教師の仕事は「すごく魅力ある仕事」だった。この仕事をしていると、Uさんは遊んでいる時よりも「楽しい」と感じる瞬間や「充実した一日」と満足できる瞬間が得られた。Uさんは授業の予習の時に今まで自分が気づかなかったような文法の使い分けを発見したり、学生たちが自分たちの限られた日本語の中で作ったいい例文に出会ったりすると「すごい」と思って楽しくなった。日本語が好きなUさんはそのような喜びを感じることのできるこの仕事を「手放したくない」と思い、これからも続けたかったのである。

U：日本語教師になろうと思ったのは　探しててぽんっとぶつかったような感じやと思う　出会いみたいな　これじゃなきゃ頑張れないんですみたいな　＜中略＞　ただ今何もお金が残ってないのがすごい悲しくて　男性と対等の関係も築けないんやなって気付いて（結婚して）家を買うとなっても私は発言権がないんやなーって愕然として　20090905U3文字化

日本語教師の仕事はUさんが「これじゃなきゃ頑張れない」と思えた仕事であった。しかしUさんは、この仕事に経済的な問題があることで「男性と対等の関係も築けない」と話し、もし結婚して家を買うとなってもお金を出せない自分は「発言権」がないと思って愕然としたのである。

3.3. タイムリミット

Uさんは、雇い主である学校側の問題について次のように話した。

> U：学校の経営者の側もすごい先生を軽く見てる　たくさんいるからいつでも代えられるし誰でも交代可能みたいな　それすごい傷つく　もうひとつの学校はキャリアの長い人から仕事を入れていくから　下っ端にはものすごいコマ数[3)]が減るわけよ　もしくは休みになる　それがメール1本でぺろってくる　それがすごいショックやったほんまに　こういう扱いなんやーって　＜中略＞　自分の存在が軽いんやろうなって　こっちはめっちゃ努力して頑張ってきて120％のエネルギーを注いでさ　月15万円いったらわーって喜んでどうしたらいいのこれ　でも他の仕事して週末（日本語教室の）ボランティアで満たされるならそれもありかなって　そのタイムリミットも刻々と　そんな選んでる場合でもなくなってきたわけやん
>
> 20100605U4文字化

Uさんは学校の経営者側が日本語教師を「軽く」見ており、「誰でも交代可能」であることに傷ついた。授業の担当数に関する連絡は非常勤であるUさんには重要なものだが、電話でも書面でもなく「メール1本でぺろって」送られてくる扱いに自分の存在は「軽い」と感じた。Uさんは一生懸命に働いてもひと月に15万円稼ぐことができれば喜ぶような生活に、他の仕事に代わることも考えた。しかし、それには自分の年齢という「タ

イムリミット」が近づいていたのである。

3.4. 専門職[4] としての日本語教師

Uさんがいろいろな不満を持ちながらも日本語教師の仕事を続ける理由の一つは、この仕事を「専門職」と捉えているからだった。

U：たぶん職人とかその専門職っていうのに憧れがあるんやろうね　そう私にしかできないっていうところに　20100605U4文字化

Uさんは「私にしかできない」という部分を持つ「専門職」に対する憧れがあった。Uさんの考える「専門職」とはいわばその道のプロフェッショナルであり、知識と経験がものをいう世界である。しかし、本来専門職とは国家資格を必要とするような専門性の高い職を指し、当然給与や待遇も優遇されている。しかし、多くの日本語教育機関が認めている日本語教師の資格とは、公益財団法人である日本国際教育支援協会が主催する日本語教育能力検定試験の合格や、420時間の養成講座での受講である。日本語教師は決して一般的な専門職に入る職業ではないと言える。それにもかかわらず、日本語教師は高い専門性を求められ、巷には日本語教師の専門性を謳った広告が溢れている。多くの人はそれが「専門職」に求められるものだと考えて日本語教師を目指すのかもしれない。

Uさんは日本語教師がやめられない理由を次のように話した。

U：教案の数をみたら今まで頑張ってきたというのがわかって　ここまで積み上げてきた経験やキャリア[5] みたいな　それは私にとっては教案なんよね　これを捨てるのかっていう　それは捨てられない　今までの私はなんだったのってなる　仕事しながら夜は勉強してすごい頑張ったよ私　＜中略＞　だからどっかに意地もあるわ

な　一番しがみついてるっていったらその部分かもしれへん　10年近く費やしてきたものをまたゼロからやるのっていう　でもゼロからやった方が楽々いまの給料を超すなっていうのがわかってるねん

20100605U4文字化

Uさんは自分の作成した「教案の数」がこれまで積み上げてきた「経験やキャリア」であり、それを捨てることはできないと言った。もし捨てることになればこれまで頑張ってやってきたものが意味を失うのである。日本語教師になるために仕事をしながら勉強したUさんは、これまでの自分の積み重ねてきた経験が日本語教師の仕事に「しがみついてる」理由かもしれないと話した。Uさんは10年近いこれまでの経験を捨て、「ゼロ」から新しいことを始める方が経済的に良くなるとわかっているが、それができずにいた。それほどUさんの日本語教師の仕事に費やしてきたものは大きく、「専門職」である日本語教師の仕事への期待は高かったと思われる。

3.5. 結婚しても続けられる仕事

Uさんは日本語教師の仕事を選ぶときに、結婚や出産など自分の人生に起こるであろう出来事についても考慮していた。

U：手に職があれば結婚して子供生んでからも戻ってこれる　そういう仕事やって最初から思ってた　しかも非常勤やったらフルじゃないから家のこともできるしって　ところがそのチャンスを使う機会がなくただ不安定なだけになってしまったっていう ＜中略＞　非常勤はいつでも自由に動ける　だから今のこの状況も自分で選んでるっていったら選んでる　それで不安定って文句言うならもうちょっと働き方変えたほうがいいと思うけど　常勤になるとか　そ

こがまた自分の矛盾しているところではあるんやけど

20090630U1文字化

「手に職」があれば、たとえ結婚して出産し、仕事を離れることがあってもまた戻ってくることができる。「専門職」である日本語教師の仕事はそれができるだろうとUさんは最初に就くときに思った。Uさんは始めから非常勤の雇用形態なら家庭と仕事の両立ができると考えていたのである。しかしUさんには結婚、出産の機会はなく、経済的に自立しようにもできないような「不安定な」状況になってしまった。雇用形態を常勤に変えたとしても日本語学校の常勤の労働条件は悪く、給料が低い上に非常勤でいるよりももっと多くのことを学校側から要求されるため、授業のことに集中できず自由に動けなくなる。Uさんは今の自由な働き方を自分が選択したと言われればそうだが、しかし、「矛盾」はしていても働き方を変えたくはないのである。このようにUさんの悩みを見ていくと、日本語教師の仕事と出会ってから、一生懸命頑張ってきたUさんは自分なりに「専門職」としての日本語教師のキャリアを積み上げてきたつもりだった。しかし、実際には日本語教師は雇う側から軽い扱いを受け、何年働こうが待遇は良くならなかったのである。Uさんの期待は裏切られ、ここまで頑張ってやってきたという思いと、この仕事をやめたくないという思いとでUさんは別の仕事に移ることもできず、年齢というタイムリミットを感じながらどうにもできずに悩んでいたのである。そして、Uさんのこのような悩みは「現実の壁」となってUさんの未来へ通じる道を塞いでしまっていたのである。

4. 考察

近年、共働き世帯の拡大により日本における女性雇用者数は増加してい

る。しかしながら、女性一般労働者の賃金は男性の69.3％と低く、その格差は拡大している（厚生労働省『平成22年版女性白書』）。日本における女性の年齢階級別の労働力率は、「25～29歳」と「45～49歳」を左右のピークとし、「35～39歳」を底とするM字型カーブを描いている（総務省統計局）。晩婚化や少子化が進んでいるとはいえ、女性が結婚や出産、育児などのためにたびたび仕事の中断を余儀なくされることは変わっていないのである。また、再就職しても多くの女性は「パート・アルバイト」といった低待遇の就労形態を選択する。このような女性の状況について、大塚（2004：78）は「働く女性が増えたとはいっても、未婚・既婚にかかわらず、生涯独身で生きていけるほど収入のある女性は意外と少ない」と述べ、その理由として「女性の社会権が一人前の人間として保障されていない」ことを挙げた。そして、大塚（前掲）は「日本の社会制度のなかで女性は、家事やケア（育児・介護）といったアンペイドワークを担い、法律婚のもとで男性に扶養される存在として扱われる」と主張した。1986年から施行された「男女雇用機会均等法」は職場での男女平等を確保し、女性が差別を受けずに、家庭と仕事が両立できるよう作られた法律であり、その後1997年の全面改正を経て、2007年には一部再改正された（厚生労働省）。しかし、男女共同参画局が平成22年に発表した「第3次男女共同参画基本計画策定に当たっての基本的な考え（答申）」では、雇用等の分野における男女の均等な機会と待遇の確保が十分に進まなかったと述べている。その理由として、女性が就業を継続できるような雇用環境整備が進んでいないことや非正規雇用から正規雇用への転換を希望する女性への支援や教育が十分でないこと、また、税制、社会保障制度に女性の働き方の選択や非正規雇用化に影響を及ぼすものがあることを説明している。しかし、それだけが理由ではないだろう。平成23年10月の時点で保育所入所待機児童数は46,620人（厚生労働省）であるが、「6歳未満児のいる

夫の家事・育児関連時間」（内閣府）の国際比較を見ると、欧米諸国で約3時間であるのに比べ日本の男性は育児や家事をする時間が非常に短く、1時間程度である。女性が安心して仕事ができるようになるためには、保育園や学童保育の充実、それにかかる費用の軽減等の支援がまだまだ必要とされるのである。

浅倉（2004：128）は女性の非正規雇用が社会から「強いられた選択」となっていると述べ、「日本企業の雇用管理そのものが持つ問題性」として「とくに正規労働者の企業組織への『拘束性』の強さ」を挙げた。そして、「性別役割によって、家庭と仕事の両方の責任を担わざるを得ない女性労働者は、『拘束性』の強い正規労働を避ける職業選択を『強いられて』おり、そのことによって、日本では、他の国よりもいっそう、非正規労働に女性が集中するという傾向がみられる」と述べた。青島（2009）は「一般に、男性は生涯を通じて働くことを当然と考え、仕事を中心とした人生展望を持っている」のに対し、「女性は、かなり早い段階からすでに、結婚・出産・育児などのライフイベントが職業生活に及ぼす影響を強く意識しており、仕事か家庭（育児）かの二者選択を迫られる場合や、就業中断の可能性を、現実的な問題として予測している」と述べた（p.7）。3.5.でUさんが結婚後も続けられる仕事として日本語教師を選択した話があったが、実はUさんのこの選択は日本の社会構造からの影響を大きく受け、性別役割分業を受け入れる選択となっていたのである。金谷（2011）はこれまでの社会の中で「女性は二次的な価値しか持たない性と位置づけられ、女性の低賃金を正当化」してきたことで、「女性は補助的職業に就くことが当たり前、家事は女性が担い、男性と責任を分かち合わないことが当たり前といった職業的・家庭的な常識を形成することになってしまった」と述べた（p.22）。矢島（2009：62）は他の先進国と日本のパートタイム割合を比べて、「日本は子どもがいない女性もパートタイム割合が高いこと」

を特徴に挙げている。Uさんの選択を考えると、女性たちは気付かないまま非正規雇用の職業を選んでおり、それが社会的に低い立場を維持する一端を担うことになってしまっているのかもしれない。

このように社会構造における問題は根深く、気づかないまま影響を受けていることも多いが、多くの女性は専門職を求めようとしている。日本語教師の仕事に多くの女性が就き、今後も続けたいというのは、日本社会で比較的女性が就きやすい仕事の一つと考えられており、そこに今後の可能性を見出そうとするからではないだろうか。3.4.のUさんの発言を見ると、日本語教師の仕事に対して「自分にしかできない」仕事という「専門職」のキャリア形成に対する期待が高かったことがわかる。しかし、3.2.でUさんが「男性と対等の立場も築けない」と言ったように、日本語教師の仕事は社会的地位が低い。それは日本人なら誰でも日本語を教えられるだろうと思われているためにその専門性を評価されないことや、ほぼ無償のボランティアで関わる人が多いことなどが影響していると思われる。3.3.のUさんの発言にあるように、経験や知識を増やして専門性を高めたとしても日本語教師は「軽い」扱いを受け、長く続けるほど生活は苦しくなっていく。そして、別の仕事に移ることを考えるようになると今度は年齢制限があることで焦りが生まれる。その焦りの程度は個々の教師によって違うだろうが、独身で一人暮らしであるUさんの場合、経済的な問題はより切実な死活問題である。しかし、やりがいのある仕事だと思って必死にやってきた仕事をやめてしまうことに抵抗を感じる教師は多い。3.3.でUさんは自分の書いた「教案の数」がこれまでの自分の「経験やキャリア」のように見え、なかなか転職を決断できなかったと話した。Uさんの発言からは、日本語教師の仕事がいかにこの社会でキャリアの積みあがらない職業かがわかる。

6. おわりに

近年、キャリアの意味するものが変化し、これまでの「職業」に限定されたものではなく、個人の人生の全般を意味する「ライフキャリア」の考え方が主流になってきた（岡村, 2009）。岡村（前掲：112-113）は「ライフキャリアとは、人々の生活や生活体験の蓄積である」と述べ、「自分自身が自発的、意識的あるいは無意識的に選択しながら形成されていく」ものであるとし、「『強いられた人生』を『選び取る人生』へとキャリアデザインすることが可能である」と主張している。しかし、いまだ既存の日本の社会構造の中では、多くの女性が積極的に選択できる状況ではない。私は今後、女性たちが社会の枠組みに縛られずに自分の「ライフキャリア」として日本語教師の仕事を選択し、自分の人生を創造していく姿を見ることができることを期待し、教師である前に一人の女性としての人生をしっかりと歩いていける社会が早く来ることを切に願う。

（注）

1）2010年東京都及び近郊6県の日本語学校に依頼。75校361人の日本語教師の協力を得て調査された。

2）最初の8桁の数字は西暦年月日を表し、その後に続く文字はデータの種類を表す。「200804304T1文字化」は、2008年4月30日に「語りの場」として設けた4Tの会の1回目のデータであることを示す。また、インタビューデータの引用部分で「U4文字化」とあるのは、Uさんの4回目のインタビューデータの文字化であることを示す。

3）「コマ数」とは、授業を時間単位に区切り1コマとして数える際の呼び名である。1コマは通常45分から50分であるが、大学などの場合は90分である。非常勤講師はコマ単位で時給が決まっていることが多い。

4）労働基準法第14条には、国（厚生労働省）が定める高度な専門知識を有するものとして、専門職が載っている。例えば、博士の学位を有する者や公認会計士、医師、弁護士、一級建築士、社会保険労務士などの資格を有する者、

そして、特許法に規定する特許発明の発明者などである。

5）通常キャリア（career）は「人が辿るさまざまな経歴や経験のなかの、職業経歴に焦点を当てて使われる」（青島, 2009: 3-4）。

（引用文献、参考URL）

青木直子（2006）「教師オートノミー」春原憲一郎・横溝紳一郎（編者）『日本語教師の成長と自己研修 ── 新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして』（pp.138-157）凡人社.

青島祐子（2009）「キャリア理論の現在 ── キャリア概念の理解を中心に」矢澤澄子・岡村清子（編）『女性とライフキャリア』（pp.3-40）勁草書房.

浅倉むつ子（2004）『労働法とジェンダー』勁草書房.

大塚陽子（2004）「福祉とジェンダー」池内靖子・二宮周平・姫岡とし子（編者）『改訂版21世紀のジェンダー論』（pp.77-88）晃光書房.

岡村清子（2009）「女性のライフキャリアと福祉の仕事」矢澤澄子・岡村清子（編）『女性とライフキャリア』（pp.111-152）勁草書房.

金谷千慧子（2011）『「働くこと」とジェンダー』明石書店.

西田朋美（2007）「日本語教師をやめない理由－Narrative Inquiryによる二人の教師の自己理解－」大阪大学大学院文学研究科修士論文.

平本照磨編（2011）『月刊日本語』（3）アルク.

矢島洋子（2009）「第2章　我が国の女性就業の特質」武石恵美子（編）『女性の働き方』（pp.44-70）ミネルヴァ書房.

Clandinin,D.J.& Connelly,F.M. (2000) *Narrative Inquiry* : *Experience and story in qualitative Research*. Sans Francisco,CA : Jossey-Bass.

Clark,C.M. (2001) Talking Shop : *Authentic Conversation and Teacher Learning*. New York,NY : Teachers College Press.

日本国際教育支援協会（n.d.）「日本語教育能力検定試験受験者男女比推移」http://www.jees.or.jp/jltct/index.htm

厚生労働省（2010）『平成22年版女性白書』http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/10a-all.pdf
（上記アクセス日2012年7月5日）

厚生労働省（n.d.）「男女雇用均等法関連書類」http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/danjokintou/index.html

総務省統計局（2012）『労働力調査』http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.htm

内閣府（2012）『平成24年版男女共同参画白書』
http://www.gender.go.jp/whitepaper/h24/zentai/pdf/index.html
（上記アクセス日2012年7月15日）
厚生労働省（2011）「保育所入所待機児童数（平成23年10月）」
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000022mcp.html
文化庁（2011）『平成23年度国内の日本語教育の概要』
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h23/gaiyou.html
男女共同参画局（2011）「雇用等の分野における男女の均等な機会と待遇の確保」http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/kihon/sanjikeikaku/toshin/
（上記アクセス日2012年7月28日）

付録1：インタビューや会話データ内で使用する記号の凡例

―	語尾の伸びを表す	！	勢いのある強い口調を表す
【笑】	笑い声を表す	（　）	内容補充
＜　＞	筆者による注釈や注記	［　］	発話の重なり部分
	文字化の中の1文字分の空白は句読点を表す		

（大学院博士後期課程単位取得退学）

SUMMARY

Career Development for Teachers of Japanese as a Second Language: The Gendered Social Structure in the Japanese Society

Tomomi SUEYOSHI

This paper explores the causes of difficulties in career development for teachers of Japanese as a second language. According to a survey of Cultural Agency about 80% of Japanese language teachers working in Japan are either volunteers or part-timers. Even in a paid employment, their jobs are, in many cases, unstable, underpaid, and have no clear career path to better positions. Another survey by a publisher ALC indicates that the majority of part-time teachers are women. This seems to suggest that the poor working conditions of Japanese language teachers reflect the gendered structure in the Japanese society, where women's career is often disrupted by marriage and child rearing, and, when they go back to join the workforce later, they are often forced to work part-time. This is a result of traditional expectations of women to be homemakers and caregivers. In this paper the author takes an experienced female teacher's story as an example and explains how a woman aspiring to be a professional ends up in a dead-end job.